

第5回新湊みなとまちづくり戦略会議議事録

日時：平成18年12月1日（金）

午後2時50分～午後3時30分

場所：堀岡漁業協同組合2階会議室

事務局：お約束の時間にはなっておりませんが、皆さんおそろいのようなので、意見交換会ということで始めさせていただきます。はじめに、戦略会議の委員長である雨宮先生からごあいさつをお願いします。

委員長：ご苦勞様でございます。戦略会議として初めて見学させていただきありがとうございます。このメンバーの多くは、新湊の東西の埋立地を更に特色のあるまちにしていくにはどうしたらいいかということで、ただ考えるだけではなくて、行動をしようということで動いております。

近畿大学が来られて約15年が経ち、幸い撤退することなく、今日見せていただいたところでは、地道に地元の中で苦勞しながら動いておられる姿が分かったような気がします。やはり、外からただ考えただけではだめだなということをつくづく思いました。

私自身、施設を見学させていただいたのは、ちょうど5年ごとに見学させていただいているみたいで、着実に動いているなという感じを受けます。こちらにおいでて長く定着しているところが苦勞しているのを、よりやりやすくすること、そして核になって、この東埋立地が海を活かしたまち、この場所は近未来を考えた新湊のまちの活性化に結びつくということで、海をどう活かしていくかということとともに、環日本海との関係の拠点にしていく場所にしたい、そういう意味では、近畿大学の水産に関する地道な努力が報われるように、こちらの方も考えて行動しなければならないという意味で、今日の見学会は非常に良かったように思います。これをきっかけに、今後、大勢の学生と多くの研究者がここに住んでですね、議論ができるような場になってくれればという願いがあります。

そういうことで、今日は、毎日いらっしゃるわけではないので、せっかくの機会ですから、見学の後、この新湊のまちづくり戦略に関わるようなこと、或いは近畿大学の水産研究所のことについて、どんどん質問・意見交換をして、このまちづくりが一步でも進むようになればと思います。

事務局：それでは、まず、近畿大学水産研究所富山実験場の概要と今後の展

望ということで、少しお話いただければと思います。その後、意見交換ということをお願いします。

近畿大学水産研究所富山実験場：今日はありがとうございます。実際に見ていただくということは、非常に意味があることだと思います。水産職がどういうものなのかということは、なかなか目に見えにくいものであるかと思います。というのは、一つは養殖の主体がいけすの中で行われていることが多くて、海に行かないと分からないということで、陸から見てもいけすがあるというのが分かるくらいで、実際どうなのか、魚が泳いでいるのも見えませんし。また、陸上で魚を飼っているのも、海の魚を陸の上で飼うということはどういうことなのかというように、やはり見ていただかないと分からない。どういう問題点があるのかということが、分かっていたいただければと思います。

私たちの水産研究所は、視察のはじめにお話させていただきましたが、当然大学ですから、教育と研究ということが第一に使命としてあります。しかし、私立の大学の一つの特色として、やはり私たちは研究のための研究をするわけではない、これを産業化して地元の人たちと一体となってやりたいというのが、この水産研究所の方針なんです。ですから、私たちがこちらに来させていただくことにあたって、地元の要望があったから、来させていただいたというのが実際のところなんです。私たちが来たいといって、手を挙げたわけではないんです。私たちはそういう要望がある中で、どういうことができるだろうということを考えて、そして今の姿になっているということです。初期の目的からして、私たちが研究開発をし、私たちは自分たちで運営費を稼ぎながら、地元の産業化の一助になっていることが、私たちの目的です。ですから、この堀岡養殖漁協さんがヒラメの養殖をやるということと私たちが来るということは、同時にスタートしまして、それをビジネスとしてやっていくということで、まず最初そこから始まっています。それがなければ、私たちだけが出てくることはなかったというように考えています。他の実験場、奄美や白浜、串本も全部そのような形です。

実際運営して、すべての経費を稼ぐということは大変なことです。実のところ、あまり状況は良くないということで、少し赤字になっているところなんです。ただ、10年ほど前というのは、かなりの利益を上げて、大学のほうに還元していたということもあります。ですから、社会の情勢もそうであったということもありますが、やり方を間違えなければ、地元の人たちときっちり手を組んでやれば、そういうことが可能なんだと、大学も可能なんだということ

を広めていけたらと思いますし、日本海側には、ほとんどそういった施設はないんです。それは、最初申し上げましたように、冷たい水の期間が長いというのが問題なんです。そこをなんとか、日本海側でも、陸上であれ、またいけすを工夫するということもあるかもしれませんが、魚を飼って、それを産業としてやっていける、ただ魚を作るんじゃないくて、今度は作ったら加工というところもあります。それは、この水産加工というのは射水市の大きな産業になっていますから、そういうところにまたご協力いただいて、名産品を作ったりというようなことをやっていきたい。そのためには、安心・安全でおいしい魚なりアワビなりを作ることを目指しています。その一つの方策として、こちらではまだやり始めたばかりなんですけど、私たちの作った魚は大学の卒業証書がついています、これは、大学出の魚なんだよということで、私たちは安心・安全に飼い方をしてます、危ない飼い方をしていません、安心して召し上がっていただける、それを保障している、それを卒業証書で表しているわけです。卒業証書には携帯電話で読み取れる記号が入ってまして、それには、生産履歴がすべて入っています。いつ生まれて、どういう餌を使って、どういう薬を使ったかといったすべてが分かるようになっています。トレーサビリティ（トレーサビリティ(Traceability)とは、製品の流通経路を生産段階から最終消費段階あるいは廃棄段階まで追跡が可能な状態をいう。追跡可能性とも言われる。）というものを備えるという形で判断するという方策を取っています。まだ、こちらではヒラメはそこまでいいいきませんが、昨日ちょうどその会議がありまして、今後そういうやり方をやっていくということで堀岡漁協さんと合意に至りました。今後、「近大堀岡ヒラメ」としてブランド化する、またその加工品なんかも射水市の水産加工業の方に順次ご協力いただいて、名産品としていきたいと考えております。

ただ、その中で、まちづくりと関連して私たちがやってきた中で一番問題として考えているのは、やはり光熱費の問題なんです。魚は、先ほど申し上げましたが、冷たいところの魚であっても温かい温度で飼ってやったほうが、早く育つんです。冷たい海の魚を冷たい温度のまま飼って育つのは鮭だけです。ですから、ノルウェーでは鮭の養殖を国家戦略として進められて、ノルウェーの国王や大臣が自ら進めている、ノルウェーは石油産出国で儲かっていますが、何十年後かにはなくなるだろう、では、何で生きていくんだということで、次の産業として養殖というものをターゲットにしたわけです。国家の戦略としてそれをやるということで後押ししている。日本の場合は、水産業ではまだそこまで理解というものはいっていないと思います。獲る漁業のほうは一生懸命やりますけれど、養殖はさっき言ったように、ヒラメや真鯛でも80パーセント

くらいが養殖のものなんですが、国はそれを国家戦略として進めるというやり方はしてくれません。日本人は今まで水産物を世界中から買ってきたわけですね、商社はそれを生業としているところがあって、それをひっくり返していくのもどうかというものもあるんだと思いますけど、今後は、どこの国でも魚食が進んでいきますから、日本から養殖魚を輸出するという時代が必ず来ますし、一部はもうそうなっています。この中国に近い立地にあるところは、すごいチャンスなんです。当然、漁獲された魚を輸出することもできますし、養殖魚も輸出することができるようになってくる、それを目指したいと思っております。実際、中国から、中国で需要があるので、こういう魚やアワビやナマコを作ってくださいという要望があるんです。そういうのに応えていきたい。ナマコなんかは生で輸出しません。中国では生は食べませんから。干しナマコにします。ですから加工の過程が要りますから、その場合は地元の方に加工していただいて、そこでも利益が出るようにして輸出していけたらなと、それが一番いいかなというように考えています。そういう形で地元に貢献していきたいし、私たちも名前を広めて、やはり学生にも来ていただかなくてははいけませんし、いろいろな研究で利用されるということも増やしていきたい、とにかく日本海側の水産養殖のモデル施設にしていきたいというのが私の考えです。そうやってがんばっています。

一番の問題点は光熱費で、これをどうするかということで、一つは自前で調達するというのを考えています。そのために、風力発電なんかも調べたりもしました。NEDOという組織が政府にありますが、新エネルギー開発機構ですが、そういうところの補助を受けながらできないかと思いましたが、風が弱いということと、初期投資に1億5千万円ほどかかり、また15年経てば償却しなければならないということで、それでは次の1億5千万円をどうやって持つて来るのかという問題もあって、そういうことで難しい。一つ今考えているのは、バイオマスのエネルギーということですね。重油は高いです。化石エネルギーというのは、二酸化炭素の問題もありますし、絶対的に値段が高いということで、これをなるべく減らす方向にしたい。じゃあ、何が代替のものになるかということで考えているのは、富山県には山があります、しかし、先日林業の協同組合に行ってきたんですが、実は富山県で木がとれるのは海なんだよと言われたんです。どういうことかということ、それだけ輸入材が多いということです。輸入材に押されて、山での生産はストップとまでは言いませんが、非常に落ち込んでしまって、太い間伐材が運び出すお金もなくてごろごろしているというような状況にあると聞いてきました。今、その問い合わせが非常に多いそうですが、そういう間伐材をボイラーで使えないかということを考えてい

ます。これから少し山のほうにもご協力をいただいて、お話をお伺いさせていただいて、そういうことをしたい。ある水産関係の会合で、やはり水産業というのは、高齢化が進んでいる、後継者がいない、魚が獲れないということで、非常に困っている。どうするのか、これは解けないパズルだとおっしゃった方がいます。それは、なぜかという、そこだけで考えているから解けないんです。これは山との物質的なやり取りと人のやり取りをして、解ける回答を持ってくる。或いは、都市を持ってくる、そういうことで解けるようになるのではないかというように、私は考えています。お互いの利益が合致すれば、ごろごろしている間伐材も、こちらへ持ってきたらエネルギーになるんですよと、こちらからは魚を持っていく、或いは、私たちの実験場はまだ1/3の土地しか使っていないんです。裏が空いているので、そこで山の方にシイタケ栽培をしていただく、そういうことでも構わないと思うんです。そういうふうには有機的に結びついた形でやらないと解けないパズル、これは当たり前だと思います。そうでなければ、いつまでたっても、解けないパズルです。よっぽど恵まれたところ、名産品があるようなところは、それだけでそこで食べていけるでしょう。日本の多くのところはそんなに恵まれていませんが、しかし日本には隠れた資源がいっぱいあって、それを動かしてやるだけで、両方が有機的に乗っていくことができるということがあるのではないかと思います。ですから、まちづくりについても、もっと緊縮した形で考えていただきたいなという気がするんです。私たちのところでは熱がほしいですから、熱を発生させる施設を近いところに持ってきていただければ、それを使うことができます。また、私たちが使ったものを、そちらに提供することもできるということで、まちづくりということに関してですね、そういうところをぜひ考えていただけたらと思います。いろいろな施設が補助金で造られたりしましたが、最初はお金がつくんですね、しかし、運営していくとなると、そのコストが非常に問題になります。それをどう解決するかという、やはり、そこできっちりとした基盤を最初に作っておかなければならない、そこをお客さんがこれだけ来だろうということで予想して観光施設を造っても計画どおりにいかないことが多いわけですね。そうではなくて、ベースとしてこれだけのものは確保できるよと、そういう施設にしておけば、お客さんが来てくれればプラスアルファと考えることができるというふうに思います。そういう形のベースとして私たちの施設を考えていただければと考えています。以上です。

事務局：ありがとうございました。それでは、ご自由に意見交換ということで、今、お話をいただきましたが、それを含めて、またそれ以外で近畿大学水

産研究所富山実験場のことも構いませんので、何か意見がございましたら。

委員長：今日、私は指名しませんので。時間が限りありますので、せっかくの機会です。

委員：バイオマス発電のことですけれども、間伐材の利用ということで、どこまでこういった話になっているのでしょうか。

近畿大学水産研究所富山実験場：まだ、森林組合の方にお話に行っただけで。しかし、現地を見てみないと分からないと思いますし、これから各組合さんにお伺いして、実際に見てみるということをしてみたいなど。実際運んだらどれくらいのお金がかかるのか、運び出すのにどんなものなのか考えてみたいというふうに思っています。

委員：今考えられている発電施設の設立費用は。

近畿大学水産研究所富山実験場：これは、なかなか自分では。これも大きなお金がかかりますので、それはどうしたらいいかと私ども考えまして。1つはこれをモデルケースと位置付けて、補助金を得られるように国に訴えていきたい。堀岡漁協さんも含めて、そういう形で。これまで風力発電だと売電という目的が多かったわけですね。電気を売って、それで村おこしをすると、だが高く買ってもらえない。しかし、それを使ってある程度の電気を得られるというベースがあれば、それとは全く違った形でやれるのではないかとこのところを訴えていきたいというように考えています。

委員：富山新港というのはロシア材が一番入っているところなんですけれども、外材だったら補助金もあんまり出てこないというところもあります。ですから、国産材利用も考えられますし、今、新湊木材組合のほうでも、そういった補助金を引っ張ってバイオマス施設ができないかと、今県立大学と進めているんですよ。

近畿大学水産研究所富山実験場：それでしたら、ぜひ、うちの後ろへ建てていただいて、その熱を使えるようにしていただきたいと思います。発電だけですと非常にもったいないです。それで生まれた廃熱を捨てるのではなくて、プールなり、融雪なり、或いは水産施設なりに使えば、また付加価値が出てくる

という形になると思います。

委員長　：射水市の市長さんも、大学と行政との連携を非常に積極的にやっているし、まちづくりの検討でも、バイオマスばかりではなく、県立大学や高専もありますし、また先ほど建物を見させていただいたら、耐熱についてどう安くしようかというのは、やはり地元の大学・高専の先生・学生間の共同研究などで、地域でやれるような感じもします。単独で考えるのではなくてね。

近畿大学水産研究所富山実験場　：そういう形でやらせていただければ、一番ありがたいと私は思います。私たちは熱の関係でボイラーとかは素人ですから、実際のところ分からないところもありますし、これから私が山へ行ってみてくるといっても、素人ですので、これも、また分からないというところもありますが。

委員　：新湊に木材組合がありますから、ぜひ来てください。

委員　：当地にこられて15～16年になられると思います。県、市、それから堀岡漁協の強い要望ということで、当初こちらに進出を決定されたときには、先ほども少しお話がありましたけれども、北電の温排水の利用ということがあったと思います。最初の段階で温排水が青写真にあって来られたと思うんですね。それが頓挫してしまって、あとで温かい水を使って、早く成長させてビジネスに乗せていこうとするのが崩れたと思うんですね。これは、なぜ北電の温排水利用というのは頓挫したのでしょうか。

近畿大学水産研究所富山実験場　：やはり、温排水を引っ張ってくるのにお金がかかるということですね。2億円くらいかかるといういましたかね。最初は景気も良かったんでしょうけれども、なかなかそうもいかないということで、お金が出ない。その代わりに燃料費を少し負担しましょうという形で、出していたんですが、しかし、私がここへ来させていただいて平成14年から来たんですが、そういう形では続かないんです。このとおり、燃料費は高騰してきました。ですから、燃料代は今いただいていません。その後、これをどうやって自前でやっていくかということが絶対必要な条件になってくるわけです。日本海側の施設は、すべてその問題で困っています。しかし、一方で熱を出している施設があるんです。それを利用しない手はないので、そういう形での施設が来ていただいたらと思います。例えば、もう一本深層水を上げると、

本当の深層水を二度熱を上げると、それで滑川にあるようなタラソセラピーの温泉を造る。そうすると、そこでの廃熱は隣で利用できます。魚を飼うことができます。そのボイラーにチップを使うというようにすれば、一石何鳥になるんです。目指すところはそういうところで、そういった形でないと続いていかないんです。

委員：深層水と高級魚がそろっているわけですが、加工販売とかはどういった形になっているんですか。

近畿大学水産研究所富山実験場：今のところ、まだまだそこまでいかないんです。いろいろ加工品も試してみたんですが、なかなかこれといった目新しいものは難しいですね。例えば、私たちが作っているのは、高級魚といえど何に使われるかといえど刺身とお寿司なんです。生で食べるものが主です。生ということは、加工しないということなんですね。それを加工するとすれば、酢じめにするとかいうことになるわけですがけれども、なかなか、それは今のところうまくいっていないです。アワビになりますと、これは煮アワビですとか干しアワビとかいうことで、加工品というのは、日本では一部は高いですが、中国ですと干しアワビにすると非常に高い値段になる。あるいは、それが名産として売れるのであれば、ここの名産としていく方法もあるでしょうし、これから進めていきたいということです。例えば、かまぼこにするわけにはいかないんです、ヒラメを。ちょっともったいないです。

委員：例えば昆布じめとかは。

近畿大学水産研究所富山実験場：やってみましたが、なかなか。すでにあるものですから、難しいですね。

委員：例えば、先ほど、養殖トラフグには、育てる環境で毒はないというお話でしたが、この研究場の中で、テトロドトキシンがあるかないか調べられるような施設はありますか。

近畿大学水産研究所富山実験場：それは今のところありませんが、今までいろいろ調べられましたけれども、特に陸上の養殖では、例えば網養殖では、ほかに何か食べたりしますが、網に付いてくる物や網に入ってくる物などありますが、陸上養殖ではそれが絶対ありませんから、そういう環境下では絶対にな

いというのが今のところ定説になっています。トラフグは、例えば九州あたりでも陸上養殖に取り組むところが出始めてきています。そういう陸上養殖をすることによって、海でかえば寄生虫がつくということはあっても、陸上で閉鎖して飼えば、そういうことがないという利点もあるんです。薬を使わなくていいということです。

事務局：私が市の立場で言うのも、国や県の方がいらっしゃって恐縮ですが、先日漫画に今ほどおっしゃったふぐの陸上養殖、愛媛県でしたが山の上で地下水を掘り、人工の塩を入れて、機械管理で養殖されて、天然のもの以上においしいというのが、築地の市場でうけている。先ほどおっしゃったようにいろんな国で魚が食べられるようになるということで、需要も増えると思いますが、同時に日本の中でもより品質の高いものが求められるということで、山の上で魚を飼うという時代になると思い漫画を見ていたところですが、そういう意味で新湊にこういった貴重な施設があるということで、お手伝いできればと思っています。

近畿大学水産研究所富山実験場：食べるものの安心安全というものが非常に問題になっていますが、例えば、魚の安心安全というものを考えると、今までは日本人は当然天然のものが良くて、養殖のものは一段落ちるんだという評価でした。しかし、天然のものはどこで育ったか、何を食べたか分からない、或いは、これまでは獲れたところと違う表示をしていたような不正な例もあって、そういう心配もあるわけです。ところが、養殖したものはすべて履歴を開示しようと思えば開示できる、更にいけすより陸上で飼ったことで、そういうものからまた遠ざけることができるということで、究極に安心安全を追求できるものになってきている。消費者の方は、やはりそうしたものがいいのかというような認識を持つようになってきていらっしゃいますから、そういうものをこれから他と差別化をしてブランドとして育てていくことは、これからのやり方だと思います。

それから、そういう魚を外国にもブランドとして売ることが可能ではないかと思っています。というものは、今日本から養殖魚を輸出とするとしたら、どのような形が考えられるかということ、一番端的な例が、1個千円の桃がタイのデパートで飛ぶように売れたと、なぜかということ、それだけお金持ちの人がそれを買うわけです。一般庶民の人に作っているのではなく、特別に手をかけてブランドとして成立しているものを出荷するということになります。まず、そうした形ではじめることが一つのやり方だと思います。それができれば、もっ

と手に入れやすい、一般庶民の人に届くようなものも作っていけると思います。今のところ、そういうものに日本人が手をかけてやっているんだ、海外の人はそれだけ手をかけるということに対してお金が発生するということに評価をします。天然のものが良くて、手をかけて育てている養殖のものが安いという日本とは、ちょっと違う。それだけ手をかけてやっているものは、それだけの値段がして当たり前だという考えをしますから、それだけの品質にしなければならないということです。そうできれば、そうなると思います。

委員長：今のお話を聞いてすぐに結びつくんですが、ウラジオストクと大連、こちら水産物、海産物が安くて、最初は食べていたんですが、地元の人でもちょっとお金のある人は買わないということで、やはり履歴の問題がこの近くでも相当おこっている。そういったことからいうと、この施設はいけるなと思いました。それと、一つ聞きたかったのですが、富山県の水産研究所とは競争関係でしょうか、それとも連携して共同開発をしているのでしょうか。

近畿大学水産研究所富山実験場：競争になることはないです。それは、富山県は他に養殖をやっているところはないわけですし、例えば長崎県でしたら、養殖の研究を水産試験場でやっております。そこでは、当然技術のしのぎあいというものもあります。しかし、富山県の場合はそうではなくて、天然のものを獲るという漁獲が主体であって、稚魚放流をして増やすというのが主体です。それでは密接にやっているかといいますと、そうもいきませんで、実は卒業生も何人かいるのですが、これからそういうところで協力させていただければなと考えております。

委員長：それと、北陸地区には水産学部がないんですね。非常に期待が大きいんですけども、先生の大学の学部の学生或いは院生がここへ来て、環日本海をバックにして、そしてここを拠点にして卒業研究であるとか、修士論文や博士論文もいいのですが、そういうので年間何テーマぐらい、過去15年間においてやっているんでしょうか。

近畿大学水産研究所富山実験場：そうですね、年間に平均して1人か2人は学生が来ます。どちらかといえば、地元に近い人が多いですね。というのは、近畿大学の本部は大阪にあるんですけども、大阪からみると寒いんじゃないかとか思うんです。和歌山のほうは暖かいから行きやすいなということで、最近少ないのが現状ですね。しかし、それは私も常駐しているわけではないとい

うのが一つの問題点でもあるわけなんです。ずっと学生の面倒をみれないということが一つの問題点になっていますね。

委員長　：地元にも学校があるわけですから、戦略会議でも先生や学生の共同研究など、いろいろな形で交流といいたいでしょうか、そういう意味では近畿大学へ地元出身の人が行っていてテーマを持っていれば交流というものはできるかもしれませんね。

近畿大学水産研究所富山実験場　：海に関すること、海水を使うものということであれば、ぜひ利用していただきたいと思いますし、私どもも別の分野の方のお知恵を拝借したいと思っています。

近畿大学水産研究所富山実験場　：ちょっと聞いてみるんですが、戦略会議に水産関係の方はいらっしゃるのかなと。そのへんが気になるところで。新湊みなとまちづくりですので、養殖に関してご存知の方は更に少ないと思いますが、獲る漁業を生業としている方はここにはたくさんいらっしゃるわけですから、やっぱりどうなのかなという感想を持ちました。

委員長　：漁協との関係は非常に密接ですか。

近畿大学水産研究所富山実験場　：はい。作業が忙しいときは、お互い行き来していますし、これからもっと密接にしてブランドというものを作っていきたいと思っています。お互いなくてはならない存在ですね。私たちも自分たちの稚魚を育ててくれるところがないと困りますし、漁協さんも事業に供給してくれるところが必要、しかも隣にあることで、すべての履歴が開示できる。一般の養殖というのは、稚魚を作る業者とイケスで飼う業者がとんでもなく離れているというのが普通です。ですから、養殖魚で履歴を開示しても、ここから先になる訳です。ここから先は不明ですというのは、他の業者であればあるんですが、一緒にやっていると、全部履歴を開示できる。私たちからすると、大学というところはそんな無茶なことはしないよということで、大学の名前を出すということで、私たちも当然その心構えでやりますし、消費者の方の受取り方も安心できるのではないかと、それを大いに利用していただきたいと思っています。

事務局　：他にございませんか。

近畿大学水産研究所富山実験場　：また、いろいろな技術を今開発していますので、新しい技術をいろいろ発表させていただきたいと思いますので、関心を持っていただければと思いますし、ほかの団体から、民間・大学を問わず利用していただければと思います。

委員長　：そういう意味では、先ほど漁協の話が出ましたが、戦略会議に漁業関係者が入ることは非常にいいと思うんですね、だけど、それだけではなくて、背後地に進出した工場、大企業がありますね、そこも入っていないわけです。その他いろいろありますが、この戦略会議自体も、私も学校関係ですが、そういうところが音頭をとるような形でですね、地元の過去の細かい関係を乗り越えないと、先ほどの熱の問題もありますが、来ていただいた当初の約束を果たさないで自前でやれという、そういう冷たさがあるんです。たぶん、これからそんなことを言ってもらえない状態なので、いままで来た人、あるいはここにいる人がいかに手をつなぐか、これが戦略会議のまちづくりだと思います。当面は、やはり海王丸パークのところにいかに賑わいを創るか、或いは内川のよさをどう売っていくか、そんなものが出発点だと思うんです。やはり、これから漁業の認識を改めて、新しい方向に向かっている人、特に学校関係で積極的に連絡を取りながら、うまく地域の連携をむしろお願いしたいと思います。堀岡漁協とは、うまく連動せざるを得ないわけですから。その一つの経験がまちづくりに生かせたら、すごく力になっていくと思うんです。

近畿大学水産研究所富山実験場　：そういうところから出発していくということであればいいと思います。ぜひそういった形で発展してほしいと思います。

事務局　：ありがとうございました。方策の実現に向けてご協力をお願いします。